

第17回日本胸部外科学会主催の思い出

第17回 会長 宮 本 忍

昭和38年(1963)10月、大阪で武田義章教授会長のもとで第16回日本胸部外科学会総会が開かれ、その席上私は次期会長に選出された。日本大学第二外科に赴任してから7年を経て教室の体制も整い総会運営の自信もついていたから、会長を喜んで引受けその翌日ホテルの1室で学術プログラムの大綱をまとめた。教室に帰ってから最初に手をつけたのは1962年から知己の間柄にあるオレゴン大学の A. Starr 教授に招待講演の依頼状を書くことであった。

ミュンヘン大学の R. Zenker 教授は1954年前任地のマールブルク大学に訪ねたとき、日本の胸部外科学会に招待することを約束しておいた関係にある。両教授とも、招待講演として日本へくることを快諾してくれた。

第17回総会は、昭和39年(1964)10月29、30日の両日東京産経会館で開催された。

第1日午前8時30分の開会式は日大吹奏楽研究会の音楽で開幕したが、3人のバトンガールが舞台上に飛び出したのはどぎもを抜かれた。驚いたのは私ばかりではないと思うが、最前席にいた Zenker 教授はたいへんご機嫌であったことが印象に残っている。第1日の午前中第1会場(産経ホール)ではシンポジウム(Ⅰ)肺結核、(Ⅱ)肺癌、午後には同じく(Ⅲ)肺高血圧症と Zenker 教授の特別講演「Fallot 四徴症の治療経験」、パネル・ディスカッション(Ⅰ)小児胸部外科が行われた。第2日の午前中にはシンポジウム(Ⅳ)血液稀釈体外循環と Starr 教授の特別講演「人工弁」があり、午後は総会后シンポジウム(Ⅴ)胸部外科手術の遠隔成績が先天性心血管疾患(和田)、後天性心疾患(曲直部・西崎)、食道癌(中山・山本)、胸廓成形術・肺切除(加納)、空洞切開術(長石・寺松)について述べられた。招待講演(Ⅰ)としては心肺疾患診断におけるエレクトロニクスー現状と将来(坂本)、ラジオアイソトープによる心肺疾患の診断(上田・飯尾)、心血管造影法(玉木)、小児心疾患の診断(大国)、小児肺疾患の診断(村上)、小児の肺機能(村尾)を第1日第2会場で行い、さらに招待講演(Ⅱ)肺機能を第2日第2会場において換気(滝島)、拡散(金上)、血流(藤本)に分けて行った。これは、胸部外科の病態生理をそれぞれの専門領域の先生方に解説していただくためであった。閉会に先立ち、パネル・ディスカッション(Ⅱ)胸部外科の将来を木本・榊原、篠井の3教授と Zenker および Starr 両教授に参加していただいたが行ったが、英語は教室の杉村君に、ドイツ語は大畑講師に通訳してもらった。私は「日本胸部外科学会の過去について」と題し、創立から現在に至るまでの講演や演説の統計的観察にもづいてその歴史を述べたが、これは英訳して両教授にあらかじめお渡ししておいたことはいうまでもない。パネルの詳細は「日本胸部外科学会雑誌」(13: 861~866)に掲載されているから省略するが、この企画のためか閉会まで多数の会員が在席してくれた。

総会に関連した行事は、若手研究者のための心肺外科座談会、「胸部外科17年の歩み」別刷の配布、婦人の会、親善ゴルフ大会である。ゴルフ大会では、東京医大外科の村田君が優勝し、私はブービーで立派なカップをもらった。また、会長講演をやらない代りに、南江堂から10月、「胸部外科学」を出版したことや、招待講演が縁となつてのちに杉村修一郎君と瀬在幸安講師が Starr 教授のもとに留学することになったのもなつかしい思い出である。「胸部外科17年の歩み」は陸川助教授を中心としてまとめられたもので、今日には貴重な記録となっている。(日本大学名誉教授)